平成 29 年 11 月 28 日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文：William Faulkner の *Sanctuary* と *Sanctuary: The Original Text* の比較研究
学位請求者　：文学研究科博士後期課程英語英米文学専攻
岡 田 大 樹

審査委員
主査　文学部教授　並　木　信　明

副査　文学部教授　坂　野　明　子

副査　東北学院大学非常勤講師（東大名誉教授）　平　石　貴　樹

審査報告

１．学位請求者の研究活動

岡田氏は平成 21 年 4 月に専修大学文学部英語英米文学科に入学後、23 年 1 月に同好の士を集めて「探偵小説研究会」を立ち上げ推理小説創作も本格的に開始し、同年 12 月に「六原反田達文の葬送」という小説で専修大学の鳳賞優秀賞を受賞する。24 年 12 月主査の並木教授の指導の下で「『オトラントの城』に見られるゴシック・リヴァイヴァルの影響」という題の卒業研究を完成させ、英米文学への関心を強めて、25 年 4 月に大学院（文学研究科修士課程英語英米文学専攻）に進学する。26 年 12 月フォークナーの影響を受けて書いた小説「灰降家の崩壊」で柘植光彦文学賞を受賞。27 年 1 月に並木教授の指導の下で Sherwood Anderson の *Winesburg, Ohio* を講読し修士論文"Doctor Reefy's Paper Medicine for the Tall Dark Girl: The Change in the Idea of Grotesque from 'The Book of the Grotesque'" を提出し、4 月に博士課程後期に進学し、Anderson に影響された Faulkner について本格的に研究を始める。28 年 12 月、推理小説「盤上の異人」で鳳賞優秀賞受賞。29 年 9 月標記の学位請求論文を文学研究科に提出。9 月に学位請求論文の 1 章と 2 章に書いた内容に基づき論文「*Sanctuary* と *Sanctuary: The Original Text* における Horace Benbow の物語」を仕上げて『日本英語英文学』第 27 号（日本英語英文学会）に投稿し、採用が決まり、初校を校正した。10 月 13 日日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会（於鹿児島大学）で学位請求論文の第 1 章の一部をまとめて研究発表を行い、協会誌『フォークナー』にそれを投稿中。10 月、『文研論集』（専修大学大学院）56 集に修士論文を改稿した「『グロテスク』から『捻じれた林檎』へ――*Winesburg, Ohio* の中心概念の変化」を投稿中。また 12 月には学位請求論文の 5 章とその内容と関わる Faulkner の短篇"There Was a Queen"について多民族研究会という学会で研究発表が予定されている。このように学部生の頃から文

学研究に携わってきている。

２．口述試験

2017 年 11 月 24 日（金）に 3 号館 339 教室で午後 2 時半より 5 時半過ぎまで、最初に各章ごとに岡田大樹氏から概要の説明を行ってから、審査委員より内容に関する質問と意見を出し、充実した質疑応答を行った。

３．学位請求論文の内容

本論文はアメリカのノーベル賞作家ウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-1962)の問題作 *Sanctuary*(1931)について、フォークナーが最初に出版社に送った原稿(the Original Text=SO)とそのゲラ刷りを大幅に改稿して出版したテクスト(Sanctuary Revised=SR)の二つのテクストを詳細に比較検討し、従来の研究の方法論からは掬いきれなかった本作品のテクストの語りと構成の本質を探究しようとする意欲的な研究である。

最初に、フォークナーの研究者において *Sanctuary* がショッキングな内容（密造酒の売人によるトウモロコシの穂軸を使った女子大生のレイプ、娼館での彼女の監禁、仲間同士の殺人、無実の男のリンチなど）に加えて、再版を別の出版社から出版したときに序文に載せた「金儲けのために」「安っぽい考え」で書いたなどというフォークナーの不用意な記述が、このテクストの真の評価をいかに妨げたかについて、代表的な論文を取り上げながら紹介する。

出版社に送った最初の原稿(SO)が初稿のゲラ刷りが出るまで 1 年半もかかったことや、それを見てフォークナーが”terrible”（ひどい）と思い改訂版(SR)を仕上げた事情などについて詳細に検討する。これまで序文の影響から圧倒的に SR は SO よりも明らかに改良されたとする研究が多かったが、Original Text が出版されてから SO の方が優れていると主張する研究も出て来た一方、どちらも一長一短があり、本論では二つのテクストの優劣を判定するのではなく、また従来の比較研究の主流であるテクストの加筆と削除という方法ではなく、語りの順序の再配置そして出来事の再配置の検討により、二つのテクストが本質的に異なる構成の作品だという事実を明らかにすることを目的とすると述べる。

第 1 章「語りの順序の再配置―相対化される登場人物たちでは」では、巻末の詳細な OT と SR の各章ごとの出来事の比較図（表 A）と、OT と SR のおよそ 2 月に及ぶ時系列に沿った出来事の表（表 B)を使いながら、OT ではホレス・ベンボウ(Horace Benbow)が語り手となり、出来事が回想から始められているのに対して、SR ではホレスは他の人物と同じレベルの扱いとなり対象化されている変化を指摘する。そして SO ではホレスが、密造酒のアジト Old Frenchman Place(OFP)でリーダー格のポパイ(Popeye)という男が、仲間のトミー(Tommy)を殺害してから女子大生テンプル(Temple)をレイプして、メンフィスの娼館に誘拐・監禁した出来事を読者とともに追跡する構成になっているのに対して、SR では語りの順序を変更することによって読者が出来事を先に知り、ホレスが遅れて知るという構成に変わったこと、そして従来 SR は推理小説的だと見なされてきたが、推理小説的なのは SO であり、SR は実は反推理小説的だと分析する。さらに SO ではホレスと第 3 者の語りが同一であったが、SR ではホレスはただの登場人物となり対象化され、他の人物を評価する特権的な地位を奪われてしまい、彼から解放されたルビー（Ruby―無実の罪を着せられて逮捕起訴された密売人リー[Lee Goodwin]の内縁の妻）やテンプルらが加筆により互いに矛盾しあった発言をするようになり、語りの多声化が生じたと語り構造の変化を分析して

いる。

第 2 章「作中の出来事の再配置—Horace の物語の変貌」では、SO と SR において出来事の再配置によって SO と SR のテクストの意味が大きく変化していることを実証している。

ホレスは妻ベル(Belle)との不和により家出をし、ヨーロッパ行きを口にして、離婚の手紙を書こうとするがメンフィスの娼館でのテンプルの聞き取りと彼の嘔吐をはさんで劇的に変化した事実を分析する。さらに SO ではトミー殺害の裁判で敗北を喫したホレスが、失意のままキンストン(Kinston)に帰宅後、妹のナーシッサ(Narcissa)の手紙でリーのリンチを知る構成であるが、SR では裁判後にリンチに巻き込まれ、辛くもキンストンに逃げ帰り、それがホレスのヨクナパトーファ連作からの退場を意味することを明らかにしている。

第 3 章「削除される Horace の観察－露わになる語り手の観察」では、主に冒頭の場面の入れ替えとホレスの意識描写の削減によって、SO でのホレスの内面描写が大幅に削減され、ホレスと他の人物との関係が変化したことを論じる。たとえば、SO で冒頭に示されたナーシッサの元娼婦ルビーへの強い個人的嫌悪感は、SR ではその場面が後半に移されて町の保守層の嫌悪感を背景にするようになり、一方 SO に示されたホレスのルビーの女性性への関心は SR ではほとんど削除されて、ホレスではなくルビーの視点で彼が描かれるようになり、視点の多様性が実現しているとする。また SO では half-wit のトミーのキリスト的イメージは SR では削除され、殺人事件の犠牲者の面が強調されてハードボイルド的展開になっていると分析する。ポパイは SO では”the man”と呼ばれていたが、SR では最初のホレスと対峙する場面を冒頭に移されて名前で呼ばれるようになり、SO で”the woman”と呼ばれる Ruby と男女の対比をなしていたがポパイとなって男性性を後退させ、SR で追加された幼少時に性的不能と医者から言われた挿話を付け加えて、男性性を喪失したことが強調されるようになったと論じている。

第 4 章「Horace と Ruby の約束の意味の変質」では、SO でルビーに好意を抱くホレスが、リーからルビーの子供の将来の職を依頼され、またルビーから爪の手入れ用のオレンジ棒を持ってくるように頼まれて、いずれも承諾する場面が SO では冒頭であったのに対して、SR では後半に移動され、それらの約束がいずれも守られなかった事実を踏まえて二つのテクストの改稿を検討しながらその意味を実証的に論じている。

第 5 章「後景化する Sartoris 家」では、サートリス家の物語を中心とした長篇 *Flags in the Dust* を *Sartoris* (1929)として出版した際に削除したホレスとナーシッサのエピソードを多く取り入れた SO が、改稿されて SR となった際に削除されて町の名門サートリス家との関連性も薄れたことを論じている。サートリス家の血を引くナーシッサの息子ベンボウは SR で SO であった役割がほとんど失われ、サートリス家の女主人というべき老いたミス・ジェニーは SR でサートリス色を脱してたくましくなり、ナーシッサはホレスへの兄妹愛を失い、代わりにジェファソンという町の共同体の保守層の意識を持つようになった変化を論じている。

結論「Sanctuary 改稿の際に見出されたものと見捨てられたもの」では、1 章から 5 章までの議論をまとめながら、SO から SR への改稿において、ホレスの意識・視点・認識がテクストから取り除かれ、ホレスは対象化／相対化されているがこれはテクスト再配置のための必要な手続きであり、同時に他の登場者はホレスの語りから解放されて彼と同様に互いに相対化された存在となり、作品の多声化に寄与するようになっているとする。そして SO が完成してからゲラ刷りが出版社から送られてきた約 1 年半後、フォークナーは SO の

設計図に還元されないテクストの細部の可能性を見出し、その細部が互いに相対化しあう新たな構成を設計して SR を完成させているが、ホレスの内面の意識や、妹や義理の娘リトル・ベルへの近親相姦的な感情、そしてサートリス家の血筋の問題等を残す SO は *Sanctuary* のもう一つのテクストとして意義があると結論している。

このように難解な作品で知られるフォークナーでもとりわけ取り扱いの難しい *Sanctuary* という長篇を二つのテクストを使い、その両者の相違を事細かく実証的に研究し、従来の研究では見落とされがちな複雑な事実関係を語りと出来事の再配置の観点から論じ、新たなフォークナー研究の可能性を切り開いた学位請求論文「William Faulkner の *Sanctuary* と *Sanctuary: The Original Text* の比較研究」は、博士号を授与するのに値する優れた論文であると本審査委員会は判定する。